
ギフト

貴水 玲

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ギフト

【Nコード】

N9391B

【作者名】

貴水 玲

【あらすじ】

あるところにわがままな王子様がいました。ある夜、女神が現れて王子に試練を与えますが…。

ギフト

【前編】

輝くはちみつ色の髪と青空色の瞳を持つ、美しい王子様がいました。

王子は王様、お妃様だけでなくみんなにかわいがられて育ちました。

王子も自分が好きでした。自分が一番でした。

年月をかさねるごとに、それだけが王子にとって大事なことになっていました。

シャーリー王子の毎日は不満だらけでした。
まず今日は寝巻きのボタンがひとつはずれていたのが気に入りませんでした。

ギフト

「おまえは僕に風邪をひかせたいのか！」

世話役の少女をシャーリーは怒鳴りつけました。

少女はあやまりましたが、シャーリーは聞きませんでした。そして少女を城から追い出してしまいました。

朝食の席では、料理が冷めているとあってコックに作り直させました。けれど今度は

「まずい」と言いただきます。

「王子よ。今この国では雨が降らず、作物を作るのが大変なのだ。我慢なさい」

王様やお妃様がしかつても、シャーリーは聞きません。

結局食事につけなのまま、食堂を出て行ってしまいました。

「ああ、腹が立つっ！」

一人怒りながらシャーリーは中庭に向かいました。

夏も近づき、中庭はまぶしいほどの緑と色とりどりの花々であふれていました。

自分のように美しい庭がシャーリーはお気に入りでした。

ですが庭を見てぼう然としました。緑の芝生の上が穴ぼこだらけになっていたのです。庭師の老人がその穴をせっせと一つずつ埋め

ていました。

「どうしたんだこれは！」

驚いたシャーリーが叫ぶと、庭師が振り向きました。

「へい。モグラのしわざです。好物のミミズを探して穴を掘ったんですわ」

シャーリーは両手をふるわせるほど腹をたてました。

「ここは僕の庭だぞ！ 今すぐ見つけ出して焼き殺せ！」

こうして城中の侍女や兵士をかき集めてのモグラ退治が始まりました。

けれどもあつちの穴、こっちの穴と逃げ回ってすばしこいモグラは捕まりません。みんな頑張りましたが、結局捕まえることなく日が暮れてしまいました。

シャーリーはこれもお前のせいだと庭師を責め立てました。

「じゃが王子、モグラも必死なんですわ。わしらが作物を得るために土を掘るのと一緒にです。そうしないと生きてはいけません」

庭師は王子をさとそうとしましたが、怒りをあおるだけでした。

ギフト

「うるさい、うるさい！ モグラのことなど知るものか！ 口答えするのなら、死刑にするぞ！」

シャーリーは王様に庭師の首をちょん切るように頼みました。

王様は驚き、それはだめだと言いましたが、シャーリーは一度怒り出すと誰にも止められません。

王子の機嫌を損ねると死刑になってしまふ。

みんな庭師が悪くないと知っていても、反対することができませんでした。

王様は仕方なく、庭師の首を切るように命じたのでした。

「ああ……どうしてあの子はあんなにも残酷なことばかりするのでしょうか。心がないのでしょうか。醜い姿でもいい、優しく慈しみ深き心をお与え下さい」

お妃様は嘆きました。

そして礼拝堂で神に祈りました。何度も何度も、それは熱心に祈りました。

その夜。

シャーリーが寢床につき、意識が夢の世界へと旅立とうとしていた時でした。

ギフト

「王子」

ふと呼ばれて、シャーリーは目を開けました。
ベッドの向こうに、見知らぬ女の人が立っていたのです。

それは美しい女神でした。

真つ暗な部屋の中で、その人だけが月の光のように淡く輝いていました。

「あなたに試練を与えにきました」

「試練？」

優しくおだやかな声にうっとりしそうになると、女神は手に持っていたステッキをシャーリーに向けました。

すると突然シャーリーの体が風船のようにふくらみ始めたのです！
寝巻きのボタンが次々とはじけ飛びました。足も腕もソーセイジのように膨らんでいきます。

「うわあああ〜！」

シャーリーはベッドから転がり落ち、大声をあげて部屋中を走り回りました。そして鏡に映った自分の姿に気付いたのです。

それは足の短い、両手には大きなつめがついた、けむくじやらのけものでした。

「な、なんだこいつは〜！」

ギフト

「それがあなたが退治しようとしていたモグラですよ。これからその姿で旅に出なさい。あわれな者たちの気持ちを知り、生まれ変わるのです。三ヶ月後の十五歳の誕生日までに“いのちのしずく”を

探しなさい。それがあればもとの姿に戻ることができます。見つからなければ、あなたは一生その姿のままです」

そう告げると、女神は霧のように消えてしまいました。

「そんな！ いやだ、いやだ！ こんな醜い姿は！ 早くもとに戻して！」

シャーリーは泣き叫びました。ところがその時、王子の声を聞きつけた兵士たちが部屋に駆け込んできたのです。

「うわあ！ ばけものだ！」

シャーリーを見て、兵士たちは武器を構えました。

「中庭を荒らしたモグラの一味だな！」。

「違うよ！ 僕だよ、シャーリーだ」

そうつったえますが、誰も聞く耳を持ってはくれません。

「つかまえて殺せ！ 火を持ってこい！」

恐怖に弾かれて、シャーリーは逃げ出しました。短い足で走るのはとても大変なことでしたが、必死に必死に逃げました。

あちこちから兵士がたくさん出てきてシャーリーを追いかけます。

みんなが自分を殺そうとしている！ 信じられませんでした。

城を飛び出し追っ手がいなくなるまでシャーリーは走り続け、や

つこのことで町から離れた森の入り口まで逃げのびました。

「どうして僕がこんな目に」

遠くなったお城が涙でにじみました。こんな姿ではもう帰ることはできません。戻れば殺されてしまうでしょう。

シャーリーは“いのちのしずく”を探さねばなりませんでしたが、でもつかれはてて、入り口の木の下で眠ってしまいました。

翌朝、目を覚ましたシャーリーは森の中を歩き始めました。

おなかもすき、のどもからからでした。けれど食べ物も水もありません。太陽が高くなっても沈んでもシャーリーは歩くしかありませんでした。

しかし二日間歩き続けても森はいよいよ深まるばかり。

シャーリーはついに力つきて倒れてしまいました。

【後編】

目をさました時、シャーリーはベッドの上にいました。

緑色の目をした女の子が、シャーリーをのぞきこんで笑いました。

「だいじょうぶ？ モグラさん。はい、お水よ」

急にのどのかわきがよみがえり、シャーリーは一気に水を飲み干しました。つめたくておいしい水でした。三杯飲み干して、シャーリーは女の子に尋ねました。

「ここは？」

「ケルンの村よ。あなた森の中で倒れてたの。お父さんが見つけたのよ。いったいどうしたの？」

シャーリーは今までのいきさつを話しました。

でも女の子は笑って信じてくれません。何か言い返したかったのですが、空腹すぎて怒る気力がありませんでした。

それに気付いて女の子はあたたかいスープを持ってきてくれました。きれいな野菜がたくさん入っていましたが、シャーリーは夢中で全部たいらげました。

「ねえモグラさん、帰れなくなったらここにいたら？」

女の子が言いました。シャーリーは驚きました。

ギフト

「……僕がこわくないの？」

「どうして？」女の子が首をかしげます。

「モグラさんがいる場所はいい土地なんだって。だからみんな喜ぶわ」

それを聞いてシャーリーはほっとしました。

ほんとうに、心の底からほっとしたのでした。

女の子はミルカという名前でした。

ミルカとミルカの家族のおかげでシャーリーは元気になりました。

ケルンは森の中を切り開いてつくられた、水と緑の豊かな小さな村でした。

村には大きな水車があり、いくつもの小川が流れていました。畑がたくさんあり、そこでは作物がいきいきと育っています。

シャーリーを見て村人たちは「こんにちは」「やあ」と明るく声をかけてくれました。

シャーリーは“いのちのしずく”を知らないかと聞いてみましたが、誰も知らないようでした。ついでに本当は王子なんだと言ってみましたが、「へえ、そうかい」とみんな笑うだけでした。

シャーリーは悲しくなりました。

このままもとの姿に戻れなかったらどうしよう。

そもそも“いのちのしずく”が何なのかすら知らないのです。何かの水かと思えば井戸の水や川の水を飲んでみましたが、なんの変化もありませんでした。

「もしかしたら新しい井戸のお水かもしれないよ!」

落ち込んでいるシャーリーにミルカが言いました。もうすぐ今の井戸が枯れてしまうから、村の男の人たちが新しい井戸を掘っているというのです。

ミルカはシャーリーを新しい井戸の場所に連れて行ってくれました。そこでは村の男の人たちが、汗を流しどろだらけになって穴を掘っていました。

「水がほしいなら一緒に穴を掘るんだな。モグラなら穴掘りは得意だろう」

「どうして僕がそんなことするんだ？ そんなの召使の仕事だ」

「召使だって？ 自分で使うものは自分で作るんだ。それが当たり前なんだよ」

体にロープを巻きつけられて、シャーリーは穴の中へ降ろされました。穴の中は暗くてじめじめとして不気味でした。シャーリーはこわごわ土を掘ろうとしましたが、

ギフト

「うわあ！ 手が汚れた！ 気持ち悪い！」

そう言って逃げようと思います。男たちはそれを見て大笑いしました。

「なんだ、モグラのくせに土がこわいのか！ 役立たずだなあ」

ばかにされてシャーリーはとても腹がたちました。でもモグラの姿では言い返しようがありません。シャーリーは仕方なく、穴を掘り始めました。

でもそのうちに掘り方がわかってきて、シャーリーは楽しくなりました。モグラの手はシャベルのような形になっていて、どンドン土をかきだしていけるのです。

「うまいじゃないか、その調子」

みんなにほめられて、シャーリーはとくいになりました。

そうして井戸掘りに夢中になっていると、ミルカのお母さんの声がしました。

「お昼にしましょう」

手を止めて、シャーリーは穴の入り口を見上げました。丸い穴のむこうには、青い青い空が広がっています。

「きれいだなあ」

シャーリーはまぶしそくに空を見上げました。

ギフト

穴から引き上げてもらい、みんなでお弁当を食べました。質素な

食事でしたが、おなががすいていたのでとてもおいしく感じました。冷たい水がのどを通り抜けた時、つかれが飛んでいってしまいうなすがすがしい気分になりました。

それから毎日シャーリーは井戸掘りを手伝うようになりました。一日たつごとにそのうでは上がり、みんなに頼られる穴掘り名人になりました。

新しい井戸は大変喜ばれました。

井戸掘りだけでなくシャーリーは畑仕事も習いました。なんでもすぐ覚えて早いので、みんなにとっても感謝されました。

村人たちは感謝のしるしに、村のはずれにシャーリーの家と家具を作ってくれました。それは手作りでいびつでしたが、心のこもったとても住み心地のいい場所になりました。

シャーリーははじめてみんなに、「ありがとうございます」と言いました。

そうして一ヶ月、二ヶ月と楽しい日々は過ぎ、シャーリーは“いのちのしずく”のことなどすっかり忘れてしまいました。

ところがシャーリーが村で暮らし始めてもうすぐ三ヶ月という頃、村は水不足におそわれました。前々からの日照り続きで、川の水がすっかり干上がってしまったのです。

村に流れていた小川も絶え、作物も枯れてしまいました。

人々が頼れるのは井戸だけでした。しかしその水もいつまでもつかわりません。

その間に食べ物も底をつくでしょう。

遠くの町まで代表者が食料をわけてもらいに行くことになりました。そして残された人々で、また新しい井戸を掘ることになったのです。

焼け付くような日差しの中、シャーリーもみんなと必死にがんばりました。けれど、掘っても掘っても水は出ては来なかったのです。

四日たっても五日たっても他の町へ行った二人は戻ってはきませんでした。

やがて井戸の水も枯れ、食べ物も足りなくなり村人は次々に倒れていきます。

ミルカとミルカの家族も日に日に弱っていきました。

わずかな水で看病するシャーリーに、弱々しい声でミルカが言いました。

「ずっと東に行けば大きな川があるんだって。モグラさんだけでも行って」

ギフト

「だめだよ！ 置いてはいけないよ」

シャーリーは掘り続けました。
空腹とのかわきに耐え、水が出なければ場所をかえて朝も昼も夜も。

そのうちに村は穴だらけになりました。

そう、お城の中庭のように

そこで初めて、シャーリーはモグラの気持ちに気付いたのです。

「誰かのために、掘ってたのかもしれない」

こんな姿の自分にもやさしくしてくれた村人たちの顔が次々に浮かびました。追い出してしまった少女や死刑にした庭師や、たくさんの人たちの顔も。

きりがないほどたくさんのことをシャーリーは思い出していました。そしてみんなのやさしさに気付こうともしなかったおろかな自分を恥じました。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

血だらけになった手でシャーリーは乾いた土を掘り続けました。手の感覚はもうありませんでした。

「もうわがままなんて言わない。だからどうかみんなを助けて」

大きな涙のつぶがシャーリーの両目からこぼれて土の上に落ちました。

ギフト

すると　みるみるうちにシャーリーの足元から水がわき出してきたのです。

「それが“いのちのしずく”というのですよ、シャーリー」

どこからか女神の声が聞こえてきました。

「誰かを思う優しい心、それがいのちのしずくなのです」

水はどんどんわき出して、シャーリーを抱え上げて穴の外へ大きく噴き上がりました。

「水だ！　水だあ！」

空高く噴き上がった水は村に、森に、遠くの町まで雨のように降り注ぎました。川に豊かな流れが戻り、枯れた作物も生き返りました。

シャーリーは桶に水を汲んでせつせとみんなのもとに運びました。みんな笑顔で「ありがとう、シャーリー」と言ってくれました。

「みごと試練を乗り越えましたね。明日はあなたの十五歳の誕生日です。さあ、お城に帰りましょう」

女神が現れて微笑みました。それを聞いていたミルカがシャーリーにたずねました。

ギフト

「モグラさん行ってしまうの？ でも探し物が見つかったのね」

シャーリーは頷きました。

「うん、ずっと気付かなかっただけだったんだ」

「そう。じゃあもうなくしちゃだめだよ」

空には大きな虹がかかっていました。

夜明けとともにシャーリーは村を出ました。

別れがつらいのでみんなにはさよならは言いませんでした。

のぼる朝日がシャーリーを照らし始めました。両手からゆっくりと、人間の姿に戻っていきます。

「すてきなおくりものをもらいましたね、王子」

立ち止まって五本の指に戻っていく手をながめていると、女神の
声がありました。

ギフト

シャーリーが後ろを振り返ると、村の入り口でミルカや村人たちが手を振っていました。

ああ、ほんとだ。

シャーリーは笑顔になりました。

そしてみんなに向かって大きく手を振り、歩き出しました。

朝の光が、シャーリーの旅立ちをやさしい色に染めていました。

【後編】（後書き）

私を支えてくれる人たちに感謝の気持ちを込めて書いた童話です。すこしでも温かい気持ちになっていただけたなら嬉しく思います。

ギフト

ギフト

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9391b/>

ギフト

2009年6月15日22時01分発行